

## C.バーニーの音楽教育

### A Study of Music Education by C. Burney

今 井 民 子\*

Tamiko IMAI

#### 論文要旨

C. Burney (1726—1814) の生涯最大の業績は、いうまでもなく『音楽通史』の執筆であろう。しかし、彼は18世紀の啓蒙知識人にふさわしく、音楽史家としてだけでなく作曲、演奏、教育など音楽の多方面で活躍した。本稿では、彼の音楽教育者としての活動を検証する。まず、18世紀イギリスの音楽教育の現状を、宗教改革、産業革命という二大社会現象との関連から概観し、当時の音楽教育への需要の高まりを明らかにする。次に、C.バーニーが生涯続けた音楽の個人教授の実際に目を向け、最後に、彼が提案した、イギリス初の公立音楽学校設立の計画についてふれる。彼の長年にわたる音楽の個人教授と、音楽の専門教育機関設立の運動は、イギリス国民の教化とその音楽文化の振興を目ざしたものであり、音楽教育者として果した彼の功績は大いに評価しなければならない。

キーワード：C.バーニー、音楽教育、コンセルヴァトーリオ

#### はじめに

C. Burney (1726—1814) の生涯最大の業績は、いうまでもなく、『音楽通史』を著し近代音楽史学を確立したことであろう。しかし、彼は18世紀の啓蒙知識人にふさわしく、音楽史家としてだけでなく作曲、演奏、教育など音楽の多方面で活躍した。本稿では、彼の音楽教育者としての活動を検証する。はじめに、18世紀イギリスの音楽教育の現状を、宗教改革、産業革命という二大社会現象との関連から概観する。次に、C.バーニーが生涯にわたって行った音楽の個人教授の実際に目を向け、最後に、彼が提案した、イタリアのコンセルヴァトーリオに倣った、イギリス初の公立音楽学校設立の計画についてふれる。

#### I. 18世紀イギリスの音楽教育事情

L. A. Casella は、宗教改革と産業革命の二大社会現象が、一般の人々への誤まった音楽教育と教養科目としての音楽教育の衰退をもたらし、その結果、18世紀当時の音楽教育は著しく低下したと指摘する (Casella, 1979, pp. 1-15)。宗教改革は、礼拝における音楽の役割を増大させ、一般会衆の音楽教育は必須となった。国王ヘンリー8世の離婚問題から成立した英国国教会の典礼は『国教会祈禱書 (The Common Book of Prayer)』(1549) に従い、それ以前のカトリック教会の典礼音楽を基礎に発展した。F. Merbeck による最初の讚美歌集も出版され、エ

\* 弘前大学教育学部音楽教室

Department of Music, Faculty of Education, Hirosaki University

リザベス I 世は政令により会衆全員による歌唱を奨励した。その際、楽譜の読めない人々のために、詩篇書には楽典が添えられ、礼拝は人々の音楽の基礎教育に貢献した。しかし、17世紀に至り、ピューリタン達の礼拝では、文盲の会衆のために牧師が詩篇を一行づつ朗読、歌唱し、会衆がこれに従う方法が広まるが、このことは人々の読譜力を著しく低下させ、讚美歌の正しい歌唱を阻害する結果となった。また、従来の聖歌教育で習慣的に用いられた、1オクターブを4つのシラブルだけで唱う、「ファソラ唱法」も、正しい唱法の習得を損っていた。

一方、高等教育機関における音楽教育にも変化が生じていた。すなわち、中世以来、音楽は自由7科の一つとして、学問研究と実践の両面がバランスよく学ばれていたのが、演奏ばかりが重視され、それも言葉の明瞭な発音や身体の鍛錬という実用を目的としたものとなった。さらに、音楽自体が軽視され全く行わない学校さえあった。

このような音楽軽視の傾向は、音楽を無益な娯楽として価値を認めない新教の禁欲思想に起因すると同時に、当時のイギリスの紳士教育思想にも流れている。例えば、F. Locke は、音楽は時間を浪費させる並みの技能にすぎず、悪い仲間に入るきっかけにもなるとして、最下位の学科に位置づけている。18世紀のチェスターフィールド卿も、音楽の教養文化的価値を彫刻や絵画よりも低く見なし、実際当時の教養書の出版は音楽よりも文学や美術に関するものが多かった。また、職業音楽家に対する蔑視や偏見も強く、このことはイギリスの音楽家の成長を妨げ、国外の音楽家に多く依存する結果となった。

一方、L. A. カセッラは、1660年の王政復古の後生まれた新興の上流階級にも注目する。彼らは熱心な音楽愛好家として、音楽文化の新しい担い手となった。また、産業革命による生活水準の向上は、一般の人々の音楽活動を促進し、特に都市ではアマチュア合唱や楽器の購入、演奏が盛んになり、ハーブシコードの演奏は子女の重要なたしなみとなった。

以上のように、L. A. カセッラは、18世紀イギリスの音楽状況の中に、礼拝や高等教育における伝統的音楽文化の衰退と、新興の人々による新しい音楽文化の興隆という2つの矛盾した側面を見る。C. バーニーの『音楽通史』はまさにこのような状況のもとで書かれ、人々を啓蒙する好著となった。そして、彼の長年の音楽教師としての活動や公立音楽学校設立の提案の意義も、当時の音楽需要の高まりの中で理解しなければならない。

## II. 音楽教師の活動

C. バーニーは、精力的な著作活動と各地の教会オルガニストにたずさわるかたわら、終生、音楽の個人教師であり続けた。ここでは、L. A. カセッラの研究をもとに、C. バーニーの教師活動の実際をたどってみる (Casella, 1979, pp.40-72)。

彼の本格的な個人教授は、1746年、最初のパトロンである F. Greville のハーブシコードの指導から始まるが、F. グレヴィルからは十分な報酬と社交界の貴重な人脈を得ることになる。1749年、C. バーニーは妻子の扶養のためロンドンに出て、聖ディオニス・バックチャーチ教会のオルガニストの職を得るが、作曲や鍵盤の演奏の他、歌手教育にも活躍する。ロンドンのイタリア人歌手達は、歌唱力はすぐれていても音楽の基礎知識に欠けるものも多く、C. バーニーは、彼らに音楽の基礎教育を行ったが、歌手の中には、当時の有名なカストラート歌手、G. グァダーニもいた。

1751年、健康を害したC. バーニーはロンドンを離れ、ノーフォークの小都市、キングズ・リンで聖マーガレット教会のオルガニストとなり、有力者のパトロンとその子弟の個人教授も続

けた。彼の音楽家としての名声は高まり、オルガニスト再任の際、彼が俸給とオルガンに対する不満を教会に訴えたところ、市参事会は彼の慰留のため、待遇改善と新しいオルガンの製作を決議するほどだった。C.バーニーの生徒達の多くは、貴族や富裕な中産階級の令嬢や夫人達であった。彼は一介の音楽家ではなく、社交界の一員として丁重に扱われ、彼らから貴重な社会的な便宜を得ることになるが、その効果は後の大陸旅行でいかに発揮される。彼の弟子に対する評価は厳しく、そのすぐれた技量や感性を認めながらも、アマチュアの限界性も感じていた。

1760年、田舎の教会オルガニストにあきたらなくなったC.バーニーは、かつて青春時代を過ごしたロンドンへ再度、才能と運をかけてやってくる。彼は音楽の弟子集めに、幼ない長女のエステルをハーブシコード奏者としてデビューさせ、自らの教育成果を披露した。娘のコンサートの成功のお蔭で、彼は上流階級の多くの弟子と寄宿学校の音楽教師の職を手に入れた。

当時ロンドンでは、神童モーツァルトの出現もあり、子どもの才能教育への関心が高まっていた。因みに、C.バーニーは、1779年、非凡な音楽の才能を示す W. Crotch という男児に関する報告を英国学士院に提出している (Casella, 1979, pp.115-129)。それによると、クロッチ少年は早くも2歳の時に、音楽好きの大工の父親が作ったオルガンに興味をもち、聴き覚えた歌に伴奏をつけて演奏したという。彼の音感は大変よく、難しい転調を含む即興伴奏もマスターした。ここで注目されるのは、C.バーニーがモーツァルトの受けた早期の才能教育を決して支持しているのではなく、クロッチ少年の音楽才能が、平凡だが音楽を愛する両親によって自然にはぐくまれた結果だと述べていることである。

その後、妻に先だたれたC.バーニーは、1764年、上の二人の娘をパリに遊学させ、音楽とフランス語を学ばせるが、長女のエステルは帰国後、社交界でハーブシコード奏者として才能を発揮し、その縁で彼は新たな有力貴族の愛顧を得ることとなった。

1769年、彼はオクスフォード大学から音楽の学位を授与されるのが、この称号を彼が誇示しようとしなかったのは、彼自身、本業は音楽教師で、著作や作曲、演奏は二次的なものと心得ていたためと思われる。例えば、自作の〈鍵盤楽器のための連弾曲集〉(1777)の序文からも、彼の音楽教育者としての強い意識が窺える。彼はこれが史上初の連弾作品であることを強調し、楽器が一台ですむ簡便さ、高度な演奏技巧の可能性、2人の奏者の協力など連弾演奏の利点を挙げている。さらに A. Rees の百科事典では、連弾の音楽教育上の効果を具体的に述べ、正しいリズム感や、旋律と伴奏の分担演奏が習得できるとしている。彼は旋律優先主義の立場から、和声の伴奏が旋律を損わないよう戒めており、よい伴奏には正しい判断力とよい趣味、和声学の知識が不可欠であるとする。

1770年、『音楽通史』の執筆にとりかかった頃も、彼の教師生活は二つの寄宿学校と週に4、50回の個人レッスンをこなす多忙を極めたものだった。離れた土地の弟子には、練習方法を指示した手紙を送り、間接的に指導することもあった。例えば、後に長女エステルの夫となり音楽家として活躍する C. R. Burney への手紙には、手の形や音楽の基礎知識、和音のための運指法などが詳細に書かれている。彼はむらのないタッチで演奏するために正しい運指法を重視したが、それは、手の指を曲げて一まとめにし、指の動きがほとんどわからないようなヘンドルの演奏法を模範としていた。

1775年、C.バーニーは、イギリスの代表的文人、S. Johnson のパトロンであるスレール夫人の娘の音楽教師となるが、彼はスレール家に入出入りする「ジョンソン・クラブ」の多彩な文人、

芸術家とも交遊を深める。

作曲に関する彼の弟子へのアドバイスは、何よりも独創性を重視し、巨匠の作品から学んでも単なる模倣ではなく、その美や完璧さを自家薬籠中の物にすべし、というものだった。また初歩の段階では、音楽理論上の計算や比率で生徒を悩ますことなく、まず実践に徹すべし、とも述べている。

一方、教会音楽の歌唱法については、当時の礼拝で習慣化していた、会衆が行毎に模唱する詩篇の歌唱法を批判し、信者には音楽の知識が必要であるとした。

後に牧師となる息子の C. Burney Jr.には、「根音バス」は和声を根本から支える神の恵みにたとえるよう指示している。彼は、1804年、78歳の老齢に至るまで多忙な個人教師を続けるが、彼から教えを受けた多くの上流の子女たちは、その後音楽の熱心なパトロンとなり、イギリスの音楽文化の振興に貢献するのである。

### III. 音楽学校の設立

1774年、C.バーニーは、大陸旅行で見聞したイタリアのコンセルヴァトーリオに倣って、イギリスにも公立音楽学校の設立を計画する (Casella, 1979, pp.97-114, 今井, 1992, pp.141-152)。当時、音楽を学ぶ方法は、C.バーニー自身が経験したように、有名音楽家の見習い弟子になるか、または音楽家の家族から早期に音楽の手ほどきを受けることであった。彼はイタリア人の卓越した音楽性は、コンセルヴァトーリオのすぐれた音楽教育の賜物であることを実感し、その組織や教育システムをつぶさに調査する。

イタリアのコンセルヴァトーリオは、いずれも中世の慈善養育院を起源としている。C.バーニーはまず、ヴェネツィアの女子だけの4つのコンセルヴァトーリオ (ピエタ、インクラービリ、オスベダレット、メンディカンティ) を訪れるが、これらはすでに最盛期の栄光を失ってはいたが、彼は女生徒達の声楽や器楽の演奏に大いに啓発される。一方、ナポリのコンセルヴァトーリオは男子の音楽学校で、当代の大音楽家を多く輩出した点で重要である。しかし、かつての名門、サン・トノフリオ音楽院の教育状況は劣悪で、狭い練習室で大ぜいの生徒が勝手放題に演奏する「ダッチ・コンサート」からは洗練された感性は育たない、と彼は憂慮している。

C.バーニーは帰国後、ロンドンの慈善養育院附属の音楽学校の設立にとりかかる。彼の賛同者は、養育院の理事で著名なヴァイオリン奏者の F. Giardini だけで、彼が当初期待していた王室からの援助は実現せず、理事会全体の反応も冷たかったが、1774年、ついに理事会は彼の提案を受け入れた。関係者の書簡から、少額の授業料や、校名は「コンセルヴァトーリオ」をあえて使わず、「公立音楽学校」とすること、優秀な生徒を活用して財政強化をはかることなどがすでに取り決められていたことがわかる。

C.バーニーの提出した『イタリアのコンセルヴァトーリオに倣った、イギリスの公立音楽学校概略計画書』の主たる内容は以下のとおりである。生徒は男女の両方で、修学期間は21歳まで、7年以上の在学は認められない。生徒の音楽活動の収益は、生徒の生活費と教育費、慈善院の運営費にあてられる。ヴェネツィアとナポリのコンセルヴァトーリオを模範として、主に歌唱を教える女子のクラスと、作曲と器楽を指導する男子のクラスの2つを設ける。音楽の十分な才能を期待できない生徒は、経費のかかる楽譜の筆写や書類の管理、楽器の製作、調律、修理などに従事させる。男子生徒は在学中、単独またはグループで教会やオペラ劇場、コンサ

ートに出演し、応分の報酬を得ることができる。

女生徒のソプラノ歌手としての育成は、多大な時間と労力を要するので困難が多い。女声歌手の不足は、ロンドンの他の慈善学校から補充することが必要である。卒業後、行くあてのない女生徒は、結婚か就職がきまるまで学校にとどまり、年少の生徒を教えることが許される。修業年限の規定や男女別の教育内容、才能のない生徒の取扱いなどは、イタリアのコンセルヴァトーリオに従ったものだが、ヴェネツィアで盛んな女子の器楽教育はここでは行われない。

C.バーニーの音楽学校設立の計画は、結局日の目を見なかった。理由としては、楽器の騒音を懸念する付近の住民による反対、有力な味方であったF.ジャルディーニの離反、C.バーニーとF.ジャルディーニを高給の監督官に配した人事計画などが考えられる。

C.バーニーの発案が実現するのは、半世紀後、校長、J. Brownlow の時であり、彼はC.バーニーの意図した少年軍楽隊も組織した。C.バーニーが音楽教育史の上で重要なのは、彼の構想をもとに、イギリスの近代的音楽教育機関である王立音楽院 (The Royal Academy of Music) が創立されたことである。彼は『設立計画書』の中で、イタリア人が音楽にすぐれているのは、教会の礼拝であらゆる階層の人々がよい音楽の演奏を聴き、それが人々の趣味の形成につながるからだとしている。彼の音楽学校設立の目的は、イギリス国民全体における音楽の趣味の確立と、音楽文化の発展にあったといえよう。

#### 参考文献

今井民子 18世紀の女子音楽教育, 日伊文化研究, pp.141-152, 1992

D. Arnold Orphans and Ladies, the Venetian Conservatoires (1680-1790), *Proceedings of the Royal Musical Association*, vol. 89, 1962-63

D. Arnold Instruments and Instrumental Teaching in the Early Italian Conservatoires, *The Galpin Society Journal*, March, 1965, vol. XVIII

D. Arnold Orchestras in Eighteenth-Century Venice, *The Galpin Society Journal*, April, 1966, vol. XIX

D. Arnold Education in Music, V. Conservatories, *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol. 6 p. 19, London, 1980

L. A. Casella Charles Burney The Pedagogue, U.M.I. Dissertation Services, Michigan, 1979

J. C. Kassler Burney's Sketch on a Plan for a Public Music-School, *The Musical Quarterly*, vol. 58, No.2, 1972, April, pp. 227-34

P. A. Scholes, ed, Dr. Burney's Musical Tours in Europe, i, An Eighteenth-century Musical Tour in France and Italy, Oxford, 1959

(1997.1.6受理)